すゝめ

患者さんと慶應義塾大学病院をつなぐ
コミュニケーションマガジン

KEIO UNIVERSITY HOSPITAL
Communication Magazine

Vol.22
June 2024

ご自由にお持ちください

「見える」ことで健康長寿へ貢献する

眼科は目の健康に関わるすべての疾患を治療します。
高齢社会においては、「見える」ことが認知症、骨折・転倒などのリスクや
その改善に密接な関係があることが知られています。
慶應義塾大学病院では「見える」を支える医療を通して、
健康長寿へ貢献するチーム医療を提供しています。

広報誌タイトル「すゝめ」とは

タイトルは明治5年から9年にわたって出版された17編を数える
福澤諭吉の大ベストセラー『学問のすゝめ』に因んでいます。

すべての眼科疾患に対応する眼科診療の〝最後の砦〟として

眼科 医師
根岸（ねぎし） 一乃（かずの）

眼科は目の機能と形態に関わるすべての疾患と外傷を治療する診療科です。対象疾患は白内障、近視、ドライアイ、アレルギー性結膜炎、緑内障といった比較的有病率の高い疾患から、網膜剥離や眼球破裂のような緊急手術を要する疾患、そして専門性の高い遺伝性網膜疾患や角膜移植を必要とする疾患、屈折矯正手術、眼窩眼形成手術など多岐にわたります。

当院の眼科では予定手術、緊急手術を含めて年間３７２０件（２０２３年実績）と多くの手術を行っています。

人は情報の約90％を視覚情報から得ており、眼はクオリティオブライフ（生活の質）に直結する重要な器官です。

超高齢社会に突入した日本において、視機能の低下は、認知症、骨折・転倒などのリスクと密接に関連していることが知られており、健康長寿に直結する眼科医療への期待が高まっています。たとえば白内障手術を行った患者さんは、手術によって視機能が改善するのはもちろんですが、見えるようになることから歩行速度が上がり運動機能が改善する、患者の主観的幸福感が高まる、などの調査結果も当教室から発表しています。

私たちは眼科医として、患者さんを失明から守り、クオリティオブライフを向上させ、健康長寿に貢献することが使命であると考え、診療、教育、研究、イノベーションと、あらゆる面から眼科医療に真摯に取り組んでいます。

慶應義塾大学病院眼科は、一般診療はもちろんのこと、19の専門外来を兼ね備えており、ほぼすべての眼疾患に対応できる体制をとっています。眼科医療の〝最後の砦〟として質の高い眼科診療を行っています。

患者さんに寄り添うロービジョン外来

専門外来のひとつであるロービジョン外来をご紹介します。

「ロービジョン」とは視覚障害により日常生活において困難をもつ状態のことです。ロービジョン外来は視力の低下に関連する問題を評価し、適切なサポートやアドバイスを提供する場所です。一般外来では眼科医による手術や投薬による加療が行われますが、ロービジョン外来では医師、視能訓練士、看護師、支援サービス担当者がチーム医療として生活支援を行います。具体的には、歩行時の白杖の使用、まぶしさを軽減する遮光眼鏡の処方、読書時の拡大読書器やルーペの使用などを手助けします。視力低下があると文書やインターネット上で必要な情報を手に入れることが難しくなるため、眼科で適切な情報をお渡しできるようにしています。ロービジョン外来では、まずは患者さんが生活や仕事で困っている部分を一緒に確認して、具体的な補助具の紹介、そして市区町村の補助やサービスを受けられる窓口へとつないでいきます。

このように慶應義塾大学病院では、視機能疾患をもつ患者の皆さんを、その疾患の急性期から慢性期まで、チーム医療でサポートする体制を整えています。

3号館3階にて新たに自由診療を開始しました

この度、慶應義塾大学病院では、新たな取り組みとして、多様化する患者さんのニーズに応えるべく、医学的・科学的根拠に基づいたさまざまな医療サービス（自由診療）を開始いたしました。

美容医療

慶應義塾大学病院で美容医療の診療を開始いたします。美容外科は形成外科の一分野なのですが、現在、手術後の合併症などに対するアフターケアが課題のひとつとなっており、大学を含めた医育施設での適切な美容医療の教育や指導が求められています。当院では、診察、デザイン、アフターフォローを含め一貫して当院医師が担当し、当院での通常診療と同水準のクオリティで診療体制を整えています。

また、社会の中での大学の大きな役割のひとつに研究があります。大学で美容医療の研究を行うことで、美容医療を安全に提供したり、新たな発想で学問的にさらに発展させたりすることができる可能性もあります。これらに基づいた、安全・安心の美容医療を提供することが、今回の慶應義塾大学病院での美容医療診療開始の目的です。今回は、痩身、黒子、瘢痕（きずあと）の治療を行う自費診療外来を開設することになりました。これらはすべて慶應義塾大学形成外科で長らく研究を行っている「瘢痕を残さない皮膚再生」の基礎研究に関連しています。

診療は完全予約制で、それぞれにお悩みに時間をとって丁寧にコンサルトし、ご満足いただける施術を施行できるよう精一杯努めてまいります。

ニューロモデュレーションセンター

これまで脳卒中や脊髄損傷などの中枢神経損傷に起因する運動障害は、ある一定の期間を過ぎると回復しないという考えが定説としてありました。しかし、近年ではさまざまな治療機器を用いた治療が開発され、生活期においても運動機能の改善が見込めることがわかってきました。当センターは、中枢神経損傷後の運動機能障害を抱える患者さんに対してニューロモデュレーション治療を行い、機能改善に取り組みます。

ニューロモデュレーションとは、神経活動を外部からの刺激によって変化させることを表します。脳卒中や脊髄損傷などによって生じる神経活動の低下や過活動をニューロモデュレーション技術により整え、運動練習の効果を高めます。具体的な治療機器として、大脳皮質の神経細胞に直接的なアプローチを行うことができる経頭蓋磁気刺激（TMS）装置、脳波から運動意図を読み取りロボットを動かすBrain Machine Interface（BMI）、生体電位信号を検出して歩行をアシストするHALがあります。当センターでは、先端的な医療機器を活用し、科学的な根拠に基づく治療を安全に提供することで、患者さんとご家族の生活がより豊かになることを目指します。

メディカルフィットネスセンター

私たちメディカルフィットネスセンターは2つの新プロジェクトを開始いたします。1つめは多血小板血漿（PRP）療法であり、もう1つはメディカルフィットネスです。

PRP療法は、自身の血液を採取し遠心分離機にかけ必要な内容分を自身の傷んだ組織に注射することで治療効果を期待する治療法です。近年急速に広まった治療法ですが、これまでその中身（血小板やサイトカインなどの量）はわかりませんでした。私たちが提供する新しいPRPは、慶應義塾大学発のベンチャーであるAdipoSeeds社との技術協力のもと作製しPRPの中身を分析できます。これにより『従来あったPRPの品質のばらつきを抑え』、『創傷治癒促進効果を大きく高める』ことができます。この世界初の特許技術を使い、PRP療法の効能、適応と限界など、しっかりとした医学的根拠も構築していきます。

メディカルフィットネスは、医師とトレーナーが密に連携し、医科学的に適切な運動療法を提供します。確かなエビデンスに基づく一人ひとりに適した運動を、薬を処方するように、「運動」を「処方」いたします。また予防医療センターや各診療科と連携して、未病の方や疾患をお持ちの方、あるいは手術後の方でも利用できるサービスを提供していきます。

赤ちゃんの頭のかたち外来

当院小児頭蓋顔面センターでは頭蓋縫合早期癒合症という病的な頭の形の変形に対する治療に力を入れております。これまで多くの赤ちゃんの頭蓋変形の相談があり診察していますが、その多くは、病的な頭蓋縫合早期癒合症に伴うものではなく、向き癖など外部からの圧力が原因の頭の歪みです。この変形を位置的頭蓋変形と呼びます。

位置的頭蓋変形は中等度以上になると、耳の位置がかわってしまったり、あるいはおでこや頬といった顔の左右非対称を起こしたりします。耳の位置がかわってしまうとメガネのさやの位置が変わってしまうために、うまくかけられないという問題が将来的に起こる可能性があります。

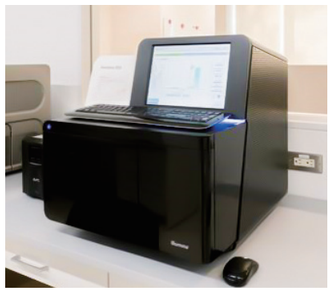
そういった状態を非侵襲的に改善させるには、赤ちゃんの頭囲が急成長する生後3ヶ月～生後6ヶ月頃までの間に、治療用のオーダーメイドのヘルメットを作成し、約半年間装着します。

当院では、小児科、脳神経外科、形成外科が連携し診療に当たり、適切な診断を行います。病気によって歪みが生じているのか、または位置的変形なのか、適切な鑑別診断（頭蓋健診）を受け、状況に応じた治療を受けることが可能です。

がんゲノム外来

同じがんでも、がん細胞の遺伝子変化は患者さんごとに異なります。がん遺伝子パネル検査は一度に数百種類の遺伝子変化を検査することが可能です。この検査により、がんの性質をより細かく理解し、一人ひとりに合った治療法を選択できる可能性が広がります。

保険診療によるがん遺伝子検査が適応でない患者さん、詳しい検査を早く行いたい患者さんなどに、自費診療によるがん遺伝子パネル検査をご案内しています。



メンタルヘルス・リエゾンセンターのご紹介

入院中の患者さんのメンタルヘルスをサポートします

2024年度より、メンタルヘルス・リエゾンセンターを設立しました。

「リエゾン」とは、連携する、橋渡しをする、こころと体をつなぐという意味があります。体の病気で入院された場合でも、入院によるストレスだけでなく、病気や手術に対する心配などから、不眠、不安、うつなど、メンタルヘルスに不調が生じることがあります。また、精神科の病気や認知症をお持ちの方が体の病気で入院されることや、せん妄（体調不良や手術などによる意識の混乱）が生じることもあります。当センターでは、患者さんが心身ともに安心して入院生活を送っていただけるよう、入院中の患者さんに対し、メンタルヘルスのサポートをします。

精神・神経科では、これまでも入院中の患者さんのメンタルヘルスのサポートに力を入れており、昨年度はのべ1000人以上の患者さんをサポートしました。当センター設立により、さまざまな診療科や多くの部門（看護部、薬剤部、食養管理室、医療連携推進部、医療安全管理部）とさらに緊密に連携し、円滑で効率的なチーム医療に努め、総合的な医療サービスの提供に取り組みます。

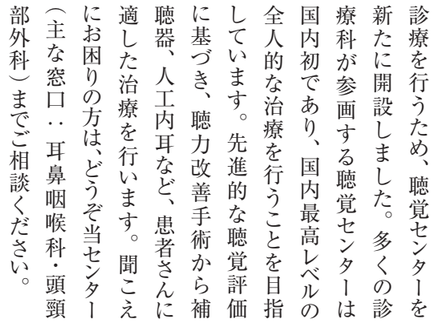
入院中にメンタルヘルスで困ったこと、心配なことがあれば、遠慮なく担当医や看護師にご相談ください。必要に応じて、当センターがサポートさせていただきます。

聴覚センター

―聞こえの低下に対する全人的医療を目指して―

聴覚障害（難聴）による症状は、「聞き取れない」「電話ができない」などの生活・仕事への支障があるのにとどまらず、「気持ちが落ち込む」「疲れやすい」などの精神面への影響も大きく出ます。特に、高齢者における難聴は「認知機能低下」「うつ不安」につながることから、現在社会的な注目が高まっています。また、小児期の難聴は言語・精神発達に大きな影響があることがわかっています。

そこで当院では、聴覚の専門医である耳鼻咽喉科・頭頸部外科を中心に、多くの科が協同して聴覚障害への科横断的な多面的診療を行うため、聴覚センターを新たに開設しました。多くの診療科が参画する聴覚センターは国内初であり、国内最高レベルの全人的な治療を行うことを目指しています。先進的な聴覚評価に基づき、聴力改善手術から補聴器、人工内耳など、患者さんに適した治療を行います。聞こえにお困りの方は、どうぞ当センター（主な窓口：耳鼻咽喉科・頭頸部外科）までご相談ください。



眼科検査のスペシャリスト
視能訓練士

視能訓練士は小児の弱視や斜視の視能矯正および視機能の検査を行う国家資格を持つ専門技術職として、1971年に植村恭夫先生（眼科学教室第四代教授）主導のもとに誕生した慶應義塾大学病院と関わりの深い職業です。

視能訓練士の業務分野は主に4つあります。

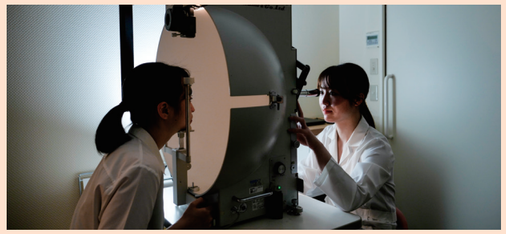
①視能矯正：視覚の発達する年齢は限られています。お答えを引き出すのが難しい低年齢の小児の視機能検査を行い、弱視や斜視に対しての視力向上や正常な両眼視機能の獲得を目的とした視能訓練を行います。

②視能検査：眼科には視力検査・視野検査・眼底写真撮影など数多くの検査があります。医師が診断や治療をするのに必要な的確なデータを提供し、眼科医療をサポートしています。

③健診業務：母子保健センター等で実施される3歳児健診における視覚検査や、当院の予防医療センターでの業務を通じて眼疾患の早期発見に貢献しています。

④ロービジョンケア：眼疾患や外傷などにより視機能が低下した状態となったロービジョンの方に対し、光学的補助具（拡大鏡、遮光眼鏡等）の選定や見え方を補うさまざまな工夫、視覚リハビリテーション施設との連携などのアドバイスを行います。

眼科には毎日多くの患者さんが来院されます。忙しい中でも常に患者さんに優しく寄り添い、質の高い検査を提供できるように視能訓練士チーム全員で日々知識技術の向上に努めています。



Information

3号館3階で新しい外来を開始しました

2024年5月7日より、3号館の3階フロアにて、自由診療を行う外来を新たに開始しました。各外来の詳細は本誌P4-P5の特集ページをぜひご覧ください。

患者サロン

がん相談支援センターでは「患者サロン」を定期的に開催しています。各回、テーマに合わせて講義、交流会の時間を設け、スタッフ・参加者同士での情報交換を行っています。2024年度は、対面・オンラインでのハイブリッド開催を予定しています。皆さまのご参加をお待ちしています。最新の情報は、下記QRコードをご確認ください。

【2024年度開催予定】

第2回　2024年8月24日　「子育て中のがん患者さんの集い」
第3回　2024年12月　「アピアランスケア（がんやがん治療による外見変化へのケア）」
第4回　2025年3月　「仕事とがん治療の両立」

【お問い合わせ】

慶應義塾大学病院　がん相談支援センター
電話：03-5363-3285

▶最新の情報はこちらのQRコードからご確認ください。

がん患者である親とその子どもサポートチーム（SKiP KEIO）主催

「Teens seminar（ティーンズセミナー）」参加者募集

13歳～18歳のお子さんを対象にしたプログラムを今回初めて開催いたします。医師や薬剤師、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーからがんとその治療について学んだ後、がん治療の現場を知るために病院内を見学します。また、参加する同年代の仲間と共に、親ががんの治療を受けていることで抱く感情について学び、共有します。多くの方のご参加をお待ちしています。

日時：2024年7月27日（土）13時～16時
対象：親が当院でがん治療を受けており、がんであることの説明を受けている13歳～18歳のお子さん

▶詳しくはこちらから

▶お申し込みはこちらから

お問い合わせ　がん相談支援センター　03-5363-3285（直通）　平日 9時～17時

SKiP KEIOとは

多職種で構成される「がん患者である親とその子どもサポートチーム（Supporting Kids of Parents with Cancer）」で、がん患者さんとその子どもへの支援を中心としたさまざまな活動をしています。

▶活動についてはKOMPAS（以下URLおよび右記QRコード）でもご紹介しています。ご参照ください。
https://kompas.hosp.keio.ac.jp/contents/medical_info/presentation/201810-02.html

建物内の電動車いすの利用について

建物内で電動車いすを利用される際は、歩行者と同等程度の速度を上限としていただき、前の歩行者は追い越さず、交差点や曲がり角では一時停止をお願いいたします。また、シニアカーは建物内ではご利用いただけませんのでご注意ください。詳細は病院のウェブサイトをご確認ください。皆様の安全のためにご協力をお願いいたします。

詳しくはこちらから▲

アンケートにご協力ください

こちらのQRコードからアンケートにアクセスしていただき、広報誌すゝめで読んでみたい記事など、ぜひご意見をお聞かせください。

COLUMN

病棟エレベーターの名称とシンボルサインのご案内

1号館南側（A・D）、同北側（B・C）と2号館の病棟エレベーターに、それぞれの名称とシンボルサインが付きました。神宮外苑の広大な緑を見渡せる1号館A・D病棟は「もりのエレベーター」、新宿副都心の高層ビル群を望む1号館B・C病棟は「まちのエレベーター」、四季折々に草花が多彩な表情を見せる中庭に面した2号館の病棟は「はなのエレベーター」です。「もりのエレベーター」には神宮の銀杏並木がゴールドで、「まちのエレベーター」にはビル群のシルエットがブルーで、「はなのエレベーター」には桜と梅のイラストがピンクで、シンボルサインとしてあしらわれています。病棟へお越しの際は、各棟の名称とサインを目印にしていただければと思います。

〈受付時間・休診日〉

外来診療時間　8時40分～12時00分、13時00分～16時00分
面会時間　※面会は医療上必要な場合に制限させていただいております。詳しくは病院のウェブサイトをご覧ください。
休診日　日曜日、第1・3土曜日／国民の祝日・休日／年末年始（12月30日～1月4日）／2024年8月31日（土）／2025年3月29日（土）
※2024年9月23日（月）、11月4日（月）、2025年2月11日（火）、3月20日（木）は外来診療日です。

〈診療担当医表〉

このQRコードをスマートフォンなどで読み取っていただくと診療担当医表がご覧になれます。なお病院入り口脇の電子掲示板にも掲載しています。

「すゝめ」Vol.22　2024年6月28日発行　編集・発行／慶應義塾大学病院広報誌編集チーム
慶應義塾大学病院 〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地　03-3353-1211（代表）　URL: https://www.hosp.keio.ac.jp/